

SDGs 国連が2030年までに解決を目指す持続可能な開発目標。本稿に書かれた目標は「効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップを奨励・推進する」。

立教セカンドステージ大学  
「サステナブルコミュニティ  
ーの思想と実践」兼任講師

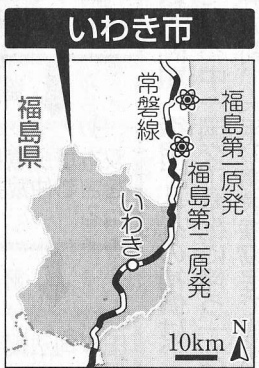
大和田順子さん



綿花の国内栽培や  
製品の普及を目指す

「全国コットンサミ

ット」が十月七日、福島県いわき市で開催され、全国から約三百人が集まりました。主催地を代表し、NPO法人ザ・ピープルの吉田恵美子理事長が、綿花栽培を通じた東日本大震災後の農業やコミュニティの再生を目指す「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」を紹介しました。



す。ほかの地域では収量の多い白い洋綿の産地が多いですが、いわきは茶色の和綿の有機栽培にこだわっています。

サミットには、立教セカンドステージ大学の卒業生らによる「NPOコットンドリームいわき」や、東京都板橋区で環境保全活動を行う「NPOいた・エコ・ネット」の皆さんが駆けつけてくれま

## 多世代が新たな価値共創

サミットは二〇一一年に始まり七回目。東北初開催でした。事務局によると全国の綿花栽培面積は計約二十三鈴。一鈴を超える産地は八カ所だけですが、各地で小規模の栽培地が増えています。メー

ド・イン・ジャパンのものづくり、環境保全やサステナブル(持続可能)なライフスタイルの広まりを反映しているのでしょうか。いわきは二・六鈴で有数の産地で

した。いずれもJKSKが一三―一五年に開催したボランティアバスに参加した人たちです。

コットンドリームのメンバーは、いわきのNPOと連携しながら、コットンの栽培・製品化・販売や首都圏における震災の風化防止活動を継続しています。現地訪問回数は五十回以上。メンバーで現役学生の青田主税(あき)さんは、活動の感想を授業で報告。「百の理屈より一の実践。答えは現地・現場にあり。『正しい』より『楽しい』が大事」と述べ、受講生の共感を呼んでいました。

ふくしまオーガニックコットンプロジェクトは大学生からシニア世代まで、多世代の作り手と買い手が参加し、物語を共有し、新たな価値を共創しています。



コットンサミットには全国から約300人が集まった=福島県いわき市で

※この連載は、NPO法人JKSKによる『結核プロジェクト』の協力を得ています